

平野惟

・研究内容

ヴィクトリア朝時代を中心とするイギリス文化史、特に人形劇「パンチ&ジュディ」。

・紹介する本

1. 中島仁『オットー・クレンペラー 最晩年の芸術と魂の解放—1967～69年の音楽活動の検証を通じて—』鳥影社、2019年

本学で主に苦を共にした中島さんによる初の著作。20世紀の名指揮者として知られるクレンペラーの晩年の活動について、その病や思想的彷徨の痕跡を丁寧に辿っています。大病の最中クレンペラーの音楽と出会われ、艱難辛苦しつつその力の不思議を見つめた修士論文を書き進められていた当時の姿を思うにつけ、この度の出版には芸術家の勇氣ある魂の「再演」を見る気がします。

2. ロバート・リーチ『「パンチ&ジュディ」のイギリス文化史』岩田託子訳、昭和堂、2019年

学部時代からお世話になってきた思い出の深い研究書がついに邦訳されました。イギリスの人形劇パンチ&ジュディの「歴史・伝統・意義」を題材とし、古くはキリスト教以前の祝祭から現代に至るまで論じ尽くしています。訳者による補足として日本でのパンチ&ジュディ研究が一覧化されており、自分の名前が初めて載った書物という意味でも思い出の一冊となりました。

3. 平野啓一郎『葬送』新潮社、2002年（新潮文庫 2005年）

二月革命期のフランスを舞台に、音楽家ショパンと画家ドラクロワの生活および創作の苦悩を描く2500枚の大作。大学入学前の春休みに読んで衝撃を受け、以来毎年この時期になると読み返してしまいます。作者が後に唱える「分人主義」の考え方の片鱗を探しつつ読むのも楽し。